

# 第1章 序 言

この資料集は『平城宮出土墨書土器集成』第1集として編集したものである。平城宮の発掘調査によって出土する土器類の量は膨大である。それらの土器類の中で何らかの形で墨書をもつもの、すなわち墨書土器は2000点をややこえる程度である。このような点からみると、墨書土器は特殊な性格をもつ土器と言える。出土土器のほとんどのものは破碎されて溝、土壙、井戸などに投棄されたものであり、文字の一部を残すだけであったり、すでに墨が薄れてしまい文字の判読不能のものも多い。本資料集では、平城宮域内で実施した第101次調査までに出土した墨書土器を集録した。判読不能のものを除いた資料点数は1070点である。

墨書は土師器、須恵器両者にあり、その器種は杯、椀、鉢、皿、盤、蓋、高杯、甕などあらゆるものに及ぶ。

記載内容は、文字の他、絵画、文様、記号などがある。文字を記すもののうち内容を知ることができるものには、その器物の使用場所、すなわち官司・官職名を記したもの、その器物の名称あるいは使用目的を記したもの、器の所有者かと思われる人名を記したもの、戯書きや習書を施したものなどがある。

これらの墨書土器と伴出する遺物、とりわけ木簡記載内容を合わせてこれに検討を加えることができれば、出土遺構に対する知見は一層高まる。たとえばそれらが出土した地域の官司名の比定も可能である。また、省、職・寮・司など職員令に定まった官司・官職については他の文献史料によって知ることができるが、しかし、その下に属するいわば実務段階ともいうべき「所」に関しては出土資料である墨書土器や木簡に負うところが多い。

宮内出土墨書土器は、発掘調査報告編集時にそのつど、該当する地域のものを中心に整理を進めて報告書に記載してきたが、しかし、その一方で進行する発掘調査にともなう遺物処理に際して逐次整理を行なうようつとめてきた。したがって、今回とりあげた資料の中には、すでに報告済みのものが含まれている。

本資料集の作成は平城宮跡発掘調査部考古第二調査室と史料調査室が共同して行ない、墨書土器の発掘および資料作成過程における討議には同調査部員全員があたった。原稿の執筆、編集の実務は考古第二調査室員、史料調査室員の協力のもとに巽淳一郎、立木 修が行なった。写真撮影および一部コロタイプ用原版の作製には八幡扶桑、佃 幹雄があたった。また、渡辺衆芳、毛利光用子、石川千恵子、池田千賀枝が協力した。